慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カール・クラウスとハインリヒ・ラマシュ：「オーストリア的中欧」理念と第一次世界大戦
Sub Title	Karl Kraus und Heinrich Lammasch : Die österreichische Mitteleuropaidee im Ersten Weltkrieg
Author	高橋, 義彦(Takahashi, Yoshihiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院法学研究科
Publication year	2011
Jtitle	法學政治學論究 : 法律・政治・社会 (Hogaku seijigaku ronkyu : Journal of law and political studies). Vol.88, (2011. 3) ,p.139- 166
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-00000088-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カール・クラウスとハインリヒ・ラマシュ
――「オーストリア的中欧」理念と第一次世界大戦

髙橋義彦

一　はじめに
二　カール・クラウスとハインリヒ・ラマシュ
(一)　ハインリヒ・ラマシュとは誰か
(二)　先行研究の整理
三　カール・クラウスのラマシュ論
(一)「よりよきオーストリア人」(F445-453: 66-67) と「平和の国際的保障」(ES: 92-95)
(二)「ラマシュに」(F474-483: 46-49) と「上院第三演説」(ES: 160-175)
(三)「第二部」(F474-483: 136-139) と「上院第二演説」(ES: 148-160)
四　ハインリヒ・ラマシュとオーストリア保守反戦思想
(一)　批判の対象
(二)　ラマシュの理念
五　まとめ

一　はじめに

一九世紀末から二〇世紀前半のオーストリアを代表するジャーナリスト・思想家であったカール・クラウス（一八七四―一九三六）の第一次世界大戦（以下一次大戦）中の反戦思想は、戦後大部の戯曲『人類最後の日々（*Die letzten Tage der Menschheit*）』（一九二二年）へと洗練・純化された。同作品の成果により、クラウスは三度にわたってノーベル文学賞にもノミネートされ、ヨーロッパ中で名声を博した。またクラウスと一次大戦をめぐる研究も同作品を中心に行われてきたといってよい。たとえば日本において最も早い段階でのクラウス紹介者の一人加藤周一は同作を次のように評している。

『人類最後の日々』は、今読んでも、少しも色あせていない。その具体的な背景は、第一次世界大戦であり、その舞台は、独墺同盟側の社会であるが、われわれはそこにわれわれの経験したすべての戦争を見ることができる。(1)

加藤のように多くの論者は『人類最後の日々』の意義を、一次大戦下のウィーンというきわめて特殊な状況下を描いた戯曲にもかかわらず、その射程が近代戦争全般への批判に向いているという普遍性ゆえに認めてきた。だが一方で戦時中にも刊行され続け、この戯曲の素材となった彼の個人誌『ファッケル（*Die Fackel*）』(2)に発表された具体的なクラウスの一次大戦批判はあまり省みられることがなかった。本論が着目するのは、このクラウスの一次大戦中のオーストリア政治への具体的、時事的な批判の内容である。

中でも本論の目的は一次大戦中のカール・クラウスの反戦思想を、オーストリア保守派の政治家ハインリヒ・ラマ

シュ（一八五三―一九二〇）の反戦思想との関連から検討することにある。両者は『ファッケル』創刊当初から親交があり、特に一次大戦期にクラウスは同じ反戦派としてラマシュを強く支持し、いくつかのラマシュ論を『ファッケル』誌上に発表している。クラウス研究において、クラウスとラマシュの関連を論じる意義は、クラウスの反戦思想をオーストリア政治史の文脈でラマシュに代表される保守派の反戦思想の系譜に位置付けること、そしてクラウスを保守派の反戦思想の基盤にある「オーストリア的中欧」の観点から捉えなおす可能性を示唆することにある。従来クラウスは「オーストリア的中欧」を肯定的に語るハプスブルク神話の冷酷な破壊者[3]とみなされ、クラウスの作品群は「ウィーンという環境に対抗して生み出された文化に他ならない（傍点引用者）[4]」と評価されてきた。こうした通説に対し、本論は鋭いオーストリア批判者クラウスにも拭いがたく内在していた「オーストリア的中欧」の視座を、彼の反戦思想、中でもラマシュのハプスブルク帝国の保守思想に根ざした反戦思想との関連から読み解こうと試みるものである。

その際本論が扱う「オーストリア的中欧」とは、広くオーストリア理念やハプスブルク神話などで言い換えられる、ドイツ＝プロイセンとは異なったオーストリア独自の存在意義を主張する思想の基盤としての「中欧」を意味している。すなわち、ドイツ＝プロイセンとハプスブルク帝国の関係拡大を目指すドイツ＝ナショナルな中欧論、特に一次大戦の文脈で言えばフリードリヒ・ナウマンの中欧論とは明確に異なる、もう一つの「中欧」である[5]。「ドイツ＝ナショナル」な中欧か「オーストリア＝パトリオティズム」の中欧か、という選択肢は一九世紀末以降のオーストリア市民層内部に深刻な亀裂を生み出したアイデンティティ問題であった[6]。後者の立場が主張する、ハプスブルク帝国の多民族性、多文化性、カトリック性などをその支柱とした「オーストリア的中欧」理念は、旧弊な多民族帝国を「保守」する機能を果たす一方で、一次大戦時の排他的なドイツ＝ナショナリズムや後にはナチズムの人種主義に対する強力な反対を生み出す原動力ともなった。オーストロ・マルクス主義の代表的理論家オットー・バウアーもこう

した理念を、特にその代表者としてラマシュの名を挙げながら、「まったく独特のオーストリアの平和主義」と評価している。[7]

だがそれは「思想」と呼ぶほど抽象的に純化されたものというよりも、ドイツの影響力が拡大しオーストリアの独自性が脅かされたときに発露される、「思想」以前のいわば「政治文化」とでも呼ぶべきものであろう。[8] それゆえ本論においてもクラウスの積極的な「オーストリア的中欧」論を論じるのではなく、一次大戦という危機の時代へのクラウスとラマシュの反応（時事的な反戦論文）から両者に共通する「オーストリア的中欧」理念を読み取ることを試みる。そのことを通じ、一次大戦前のフランツ・フェルディナントへの支持、戦時中のラマシュ反戦思想への共鳴、一九三〇年代のエンゲルベルト・ドルフス政権の支持――彼らはいずれも「オーストリア的中欧」の存在意義を説く政治家であった――に見られる、クラウスの政治的態度の変遷に一貫して通底する視座を抽出したいと考えている。

以上のように本論の目的は、①カール・クラウスの反戦思想を彼のラマシュ論を手掛かりに「オーストリア政治史」の文脈で保守反戦思想の系譜に位置付けること、さらに②ハインリヒ・ラマシュに代表される「保守反戦思想」の内容を明らかにすること、である。そこでまず次章においては、簡単にラマシュの経歴を紹介した上で、クラウスとラマシュの関係についての先行研究を整理し、両者を比較して論じる妥当性を示す。第三章においては『ファッケル』におけるクラウスのラマシュ論を、クラウスがそこで引用・言及しているラマシュの著作・演説の内容と共に紹介する。そして第四章においては、ラマシュ反戦思想のより詳細な内容を、特にその批判対象と対抗理念に着目して考察する。そうすることでクラウスが強く支持したラマシュ反戦思想を、「オーストリア的中欧」に根ざした保守思想という観点から読み解けることを提示したい。

二　カール・クラウスとハインリヒ・ラマシュ

㈠　ハインリヒ・ラマシュとは誰か

ではまずわが国ではほとんど知られていないラマシュという人物の経歴に触れておきたい。ラマシュは一八五三年にニーダーエスタライヒのザイテンシュテッテンに生まれた。ショッテンギムナジウムとウィーン大学を経て法学博士号を取得し、刑法と国際法の専門家として母校の教壇に立っていた。後に保守反戦派として志を同じくするヨゼフ・シュンペーター、ヨゼフ・レートリヒも若き日に彼の下で学んでいる。一八九九年には上院議員となり、ハーグ国際平和会議に政府代表の一員として参加した。さらにラマシュは一九〇七年に開催された第二回会議にも参加しているし、仲裁裁判所の判事にも選出されている。こうした経験から平和運動にも関心が強く、ベルタ・フォン・ズットナーの平和友好協会にも参加していた。一方で保守派の論客としても知られ、ハプスブルク帝国の国内問題に関し皇位継承者フランツ・フェルディナントのアドバイザーの役割を務めた。[9] 国際法学者として国際紛争の仲裁裁判を通じた解決を目指す平和主義、一方、愛国者としてハプスブルク帝国の枠組みを多民族の連邦国家へと改組することで維持しようとする保守主義が彼の思想の根底にあったと考えられる。

一次大戦中にはこうした思想から反戦的態度を貫き、様々な媒体で反戦言論活動を行うと共に上院で三度にわたって反戦演説を行った（これらは戦後反戦論文集『ヨーロッパ最後の時、（*Europas elfte Stunde*）』にまとめられた）。また産業家ユリウス・マインル（日本では画家田中頼璋の娘で歌手の路子の最初の夫として知られる）、ヨゼフ・レートリヒらが結成した反戦グループにも所属していた。一九一六年一一月に皇帝フランツ・ヨーゼフが逝去し、若きカール一世が帝位に就くと、講和や国内問題に関し進言も行っている。さらに戦争末期の一九一八年には、アメリカの特使であるジョー

ジ・ヘロンとスイスで接触、一〇月にハプスブルク帝国最後の首相に就任するなど現実政治でも大きな役割を果た[10]した。

高名な国際法学者であったラマシュが一九二〇年に亡くなると、各国の知識人から哀悼の意が表された。たとえば『アメリカ国際法雑誌（*The American Journal of International Law*）』においては、ジェームズ・ブラウン・スコットが「オーストリア共和国はその最もすぐれた市民を失った」とラマシュの偉大さをたたえ、[11]『イギリス国際法年鑑（*British Yearbook of International Law*）』では、W・R・ビショップが次のようにラマシュを追悼している。

> 後世のオーストリアにおいてラマシュの名は、勇敢で高貴な愛国者、旧き帝国の最後の首相の名として残るであろう。世界史においては彼の名は、アナーキーの迷宮から秩序正しく適切に組織された文明社会へと人類を導く偉大な努力のシンボルとして残り続けるだろう。[12]

クラウスとラマシュの関係について言えば、先述のようにクラウスとラマシュは『ファッケル』創刊当初から親交があり、また特に一次大戦中にはオーストリアにおける数少ない反戦知識人として共に文筆活動を行っていた。一次大戦中の『ファッケル』においてクラウスのラマシュ論は、「よりよきオーストリア人」（F445-453: 66-67）、「ラマシュに」（F474-483: 46-49）、「第二部」（F474-483: 136-139）と三度にわたって発表されている。一つ目の論文がラマシュの『労働者新聞（Arbeiter Zeitung）』への寄稿「平和の国際的保障」（ES: 92-95）に、二つ目の論文がラマシュの「上院第三演説」（ES: 160-175）に、三つ目の論文がラマシュの「上院第二演説」（ES: 148-160）に言及していることから、クラウスが一次大戦中にラマシュの反戦論文・演説に注意深く目を通していたことがわかる。またクラウスの兄弟で実業家のルドルフ・クラウスもラマシュやマインルらの反戦グループに所属し、その会合場所に自宅を提供す

るなど協力していた。[13] クラウスとラマシュの関係はこうした伝記的事実からも明白といえる。

(二) 先行研究の整理

次にクラウスとラマシュの関係に関する先行研究を、その問題点を指摘しながら整理したい。クラウス研究において両者の関係を示唆する先行研究は数多いが、そのほとんどは一次大戦中の一つのエピソードとして紹介するにとどまっている。イェンス・マルテ・フィッシャーはクラウスの反戦思想がカントのリゴリズム同様ラマシュの理念に影響されていたことを指摘するが、その影響関係の具体的な中身については全く触れていない。[14] アルフレッド・プファビガンはクラウスとラマシュに個人的な関係があったことを示唆し、非政治的著作家クラウスの「最も重要」な政治的記事として彼のラマシュ論を挙げているが、その内容の検討は行っていない。[15] またプファビガンはクラウス思想におけるラマシュ論の位置づけを読み誤っている。プファビガンはいわばクラウスの修正主義的な評価を行う研究者で、一貫した反戦平和主義者クラウスという従来の評価に対し、戦前のクラウスの保守反動思想からの「転換」を強調する議論を展開している。そしてクラウスの保守反動の証拠として、戦前のクラウス思想に顕著な進歩やテクノロジーに対する悲観的な評価、さらに保守的な皇位継承者フランツ・フェルディナントを支持していたその政治的姿勢を挙げる。そうした態度からの「転換」の結果としてクラウスの反戦平和主義を論じているのである。[16] しかし先述のようにラマシュはフランツ・フェルディナントに非常に近い立場にあった。政治的立場から考えれば、クラウスのフランツ・フェルディナント評価とラマシュ評価の間には「転換」よりもむしろ「連続」性を読み取らねばならないといえよう。クラウスとラマシュの関係に言及している数少ない邦語研究には太田隆士のものがある。だが同研究はハリー・ツォーンの研究に依拠しラマシュを『人類最後の日々』の登場人物である楽天家のモデルと捉えている点に問題がある。[17] あまりに素朴に戦争を支持する文字通りの楽天家と反戦平和主義者ラマシュを重ね合わせるのには無理があ

るのではないだろうか（『人類最後の日々』ではクラウスが自らをモデルとした不平家と、楽天家の対話が二四場にわたって繰り広げられる）。

クラウスとラマシュの関係を同時代の政治史的な文脈から読み解いているのがフランク・フィールド、エドワード・ティムズらの研究で、クラウスとラマシュを共にオーストリアのドイツとの同盟からの離脱と単独講和を模索する政治勢力と位置づけている。[18] さらにフィールドはクラウスのラマシュ評価を一次大戦期の反戦思想に限定することなく、ラマシュをクラウスが本能的に反応するような「キリスト教徒の保守派」の人物であるとみなし、一九三〇年代のドルフス支持もクラウスがラマシュと同じ要素をドルフスの中に認めたことに理由があると考え、ラマシュ支持からドルフス支持を「連続」的に捉えている。[19] 同様にティムズもクラウスのラマシュ支持を彼の保守的態度から理解し、後のドルフス支持の中には一次大戦前のフランツ・フェルディナント支持が反響していると指摘する。[20] この意味で両者の研究は、クラウスをフランツ・フェルディナント、ラマシュ、ドルフスとの関連で「オーストリア的中欧」という観点から捉える可能性を示唆する先行研究であるとも言える。しかし両者共にここで触れた全ての先行研究同様、クラウスの反戦思想とラマシュの反戦思想をテキストのレベルで比較するという作業は行っていない。パウル・シックの研究が、ラマシュのテキストを引用し、それに対するクラウスのラマシュ論の内容を紹介している数少ない先行研究の一つである。[21] またラマシュ、マインル、レートリヒら保守反戦グループに関する研究書もいくつか存在するが、クラウスが彼らを支持し『ファッケル』誌上で側面支援していたことは触れられていない。[22] 本論の主題はこの両者のテキストの比較作業を通じて、クラウス反戦思想におけるラマシュの重要性と共に、ラマシュに代表されるオーストリアの保守反戦思想の内容を示すことにある。

次章では、上記のクラウスのラマシュ論並びにそこに引用されているラマシュの論文・演説の内容を、両者のほかのテキストにも言及しながら紹介し、クラウスがラマシュ反戦思想のどのような部分に賛同していたのかを提示する。

三　カール・クラウスのラマシュ論

㈠　「よりよきオーストリア人」（F445-453: 66-67）と「平和の国際的保障」（ES: 92-95）

まず検討するのはこの二つの論文である。ラマシュの論文は一九一六年に社会民主党の『労働者新聞』に掲載されたもので、クラウスの論文はほぼこのラマシュの論文の引用からなっている。同論文の主題は軍縮である。ラマシュはドイツがハーグ会議以来の反軍縮路線を改め、「途方もないカタストロフの反復」を防ぐためにも軍縮の方向へ進まねばならないことを主張している。「政治家は従来行われてきた軍拡の道を離れねばならない」（ES: 94）。両者はともに近代テクノロジーの発展が軍拡と結びつくことで、従来の語彙で戦争を語ることは不可能であるという確信に到達していた。例えばクラウスは高度なテクノロジー兵器（一次大戦でいえば毒ガスやUボート）を用いて戦争を遂行しつつ、それを聖戦や名誉の戦死など旧来の語彙で装飾し正当化することを「テクノロマン主義」と名づけ強く批判している（F474-483: 41-45）[23]。またラマシュも別の論文でホッブズに言及しながら次のように主張する。

> ホッブズが自然状態におけるあらゆる人間の平等を、強者が暴力によって、弱者が策略によって双方を殺すことができるという事実から引き出したように、高度な〈文化的〉状況の中では、国家間の平等の問題は、双方があれやこれやの性質の手段（高度なテクノロジー兵器のこと――引用者注）を用いてお互いを絶滅させることができるという事実によって解消される（ES: 116）。

この人類文明の新たな段階において、もはや国際紛争を解決する手段として戦争は不可能であると彼らは考えた。クラウスは自らの論文の末尾を「私はハインリヒ・ラマシュ教授が、あらゆる人が立派とされるこの国で数少ない立派

な人であること、キリスト教の隣人愛が日和見的に扱われる国で、キリスト教徒であるということを疑わない」と結び、ラマシュを称賛している。

(二)「ラマシュに」(F474-483: 46-49) と「上院第三演説」(ES: 160-175)

このクラウスのラマシュ論は、ラマシュの上院での演説とそれへの反響に対する応答という形をとっている。一九一八年二月のラマシュの「上院第三演説」は、全体がオーストリアにおけるドイツ＝ナショナル派の上院議員ロベルト・パッタイの演説への批判である。パッタイはドイツとの関係強化と勝利の講和（Siegfried）を主張する政治家であった。ラマシュは同演説の中で次のように主張する。

> これ（パッタイの演説――引用者注）はライン＝ヴェストファーレンの重工業の弁護士の演説であって、オーストリアの人民（Volk）のための演説ではない（ES: 161）。

ラマシュは戦争継続を主張するパッタイらの主張が決してオーストリア人民のためにならず、むしろドイツ帝国主義を支えるドイツ重工業の利益になるに過ぎないことを喝破しているのである（この翌日社会民主党のカール・ザイツは、ラマシュの発言こそ「人民」の意見を代弁するものと賛美する演説をオーストリア下院で行った[24]）。

またパッタイらの望む勝利の講和も批判の俎上に載せられる。勝利の講和で求められる平和の「物質的・現実的保障」なるもの（新たな戦争を防ぐという口実で行われる、相手国の弱体化を目指す賠償や領土割譲などのこと――引用者注）は、つねに復讐のための戦争、量質両面での軍拡を招いてきた。それゆえ勝利の講和とは間違った講和（ein fauler Fried）に帰結せざるを得ない、とラマシュは結論付ける。「征服政治はそれが国家間の戦争状態を永続化させうるがゆえに

否認される」(ES: 166)。同演説がドイツ＝ナショナル派の強い反発を招き、演説中に激しい野次にさらされたことは議事録から読み取ることができるが、同時に議会の外でも、ラマシュは新聞紙上でハインリヒ・フリートユンクらドイツ＝ナショナル派から厳しく非難された[25]。この一連の出来事に対して、ラマシュの弟子であるシュンペーターは見舞いの手紙を書き送り[26]、クラウスは同年五月に発表した『ファッケル』誌上で同演説を肯定的に評価することでラマシュの支援を行った。

このラマシュ支持の論文が「ラマシュに」である(クラウスは一般聴衆を前に行った自作朗読会においても、数回にわたってこの論文の朗読を行っている)。クラウスはラマシュとドイツ＝ナショナル派を対比的に論じる形式を採り、パッタイ、フォン・プレーナー、フリートユンクら代表的なドイツ＝ナショナル派に対し、次のように諷刺的に批判を加えた。ドイツ＝ナショナル派は、もし今カントが自ら『永遠平和のために』を引用してみせたりなどしたらカントをののしるであろうし、またドイツ建国の父ビスマルクに対しても、彼が普仏戦争の際にエルザスだけで満足したことでののしるであろう。パッタイは「我々は勝者であり、勝利の栄冠を要求する」と叫ぶであろうし、フォン・プレーナーはカントのメンタリティーがオーストリアのそれよりも外国の思考様式に近いことを咎めるであろう、と。ラマシュを高く評価するクラウスからすれば、フリートユンクかラマシュかという選択肢自体が時代のおかしさなのである(フリートユンクはオーストリアにおけるナウマン中欧論の代表的な支持者であった)。この論説をクラウスは「ラマシュ万歳」と締めくくっている。

またクラウスは『人類最後の日々』にも、恐らくラマシュの演説が行われた日のパッタイを諷刺的に登場させ次の台詞を言わせている。

わしは奴に答弁してやったとも。一歩も退くもんかいとな――やつもじっくり考え直そうぞい、ラマシュはじゃよ。わしらは勝

利者にしてじゃ、しかりして勝利の栄冠を要求する（五幕三場、池内紀訳を一部修正）。

本論が主張するようにクラウス反戦思想においてラマシュは非常に重要な地位を占めるにもかかわらず、『人類最後の日々』でのラマシュの登場箇所はこのパッタイの台詞の中だけである。このことからもクラウス反戦思想の包括的研究には、『人類最後の日々』だけではなく、戦時中の『ファッケル』の研究が不可欠であることがわかるといえよう。

㈢「第二部」（F474-483: 136-139）と「上院第二演説」（ES: 148-160）

クラウスの同論文はオーストリアの外相オットカール・チェルニンの政治的態度と、ラマシュの上院での「第二演説」（一九一七年一〇月）を対比させたものである。これもほぼラマシュの演説の引用と、それへのクラウスのコメントからなっている。同演説の主題は講和と国際的仲裁機関の設置である。クラウスの引用箇所でラマシュはまず自らのハーグでの裁判官としての経験を語り、各国の裁判官の公正な態度を回顧している。そしてチェルニンに対し「暴力の支配ではなく法の支配」を、「国家間組織を設立し、永遠の臨戦状態（der ewigen Kriegsbereitschaft）の場所に平和の受け入れ準備（Bereitschaft zum Frieden）を整えること」を、戦況の好転いかんに関わらず履行するよう求めている。クラウスは論文末尾で「これ以上鮮明に、思慮深く、人間的に精神的に語ることは不可能であろう」と、ここでもラマシュを絶賛している。

クラウスにとって同じ保守派でもラマシュとチェルニンの違いは、前者が一貫して講和を求めているのに対して、後者が講和を望みつつドイツの勝利の講和にも期待するという二枚舌を駆使していることにあった。特にチェルニンが協商国側との講和に失敗し失脚した一九一八年四月以降、クラウスは「天才チェルニン」（F474-483: 1-22）、「原

理的声明」（F484–498: 232–240）などの論文で厳しくチェルニンを批判している。ラマシュ自身もチェルニンの外交には懸念を持ち、上記のように戦況の好転によって目指す講和の内容が変わることが無いように釘を刺しているし、「第三演説」においてもチェルニンが中立国で信頼されていないことへの憂慮を語っている（ES: 167）。現にアメリカの特使ジョージ・ヘロンの回想の中でも、チェルニンはつねにドイツ宮廷とルーデンドルフの意向で動き、ドイツ＝ナショナル派とつながっていたと記されている[27]。クラウスは一つの演説で「講和」と同時に「拳（Faust）」を語るチェルニンと、一貫して講和を語るラマシュとを対比し、後者を評価しているのである（F474–483: 136）。

以上のように三つのラマシュ論でクラウスが引用したラマシュの論文・演説は、それぞれが軍縮、ドイツ＝ナショナル派とドイツ帝国主義の批判、講和と国際的仲裁機関の設立を主題とするものであった。だがこれらの主題それ自体は、字面だけを見れば「オーストリア的中欧」とは無関係の一般的な反戦平和思想である。次章ではこうしたクラウスの支持するラマシュの反戦思想が、「オーストリア的中欧」理念に根ざしたハプスブルク帝国の保守思想から発したものであることを、ラマシュ反戦思想を要約しながら提示する。それによってクラウス反戦思想がオーストリア保守反戦思想の系譜に位置することを示すと同時に、ラマシュに代表されるオーストリア保守反戦思想の内容を考察したい。

四　ハインリヒ・ラマシュとオーストリア保守反戦思想

㈠　批判の対象

冒頭で触れたように、「オーストリア的中欧」理念とはドイツ＝プロイセンとは異なるオーストリアの存在意義を

説く主張である。それゆえ一次大戦において、ラマシュの批判の主眼はドイツ帝国とヴィルヘルム二世に向けられ、オーストリア国内では「第三演説」に見られるようにドイツ＝ナショナル派に向けられることになる。

上院議員であったラマシュはクラウスのように表立ってドイツ＝プロイセン批判を行ったわけではない。しかしラマシュは「ドイツ＝ナショナル派の政治のあらゆる形式に対する鋭い敵対者」であった[28]。ラマシュの論文の端々には、権力政治と軍拡の帰結である一次大戦の原因がドイツにあることを示唆している部分がある。それはヨーロッパで軍拡競争が開始された年としてドイツ帝国が成立した一八七一年を挙げていること（ES: 114）、またハーグ会議でドイツ（並びにフランス）の代表が強硬に軍縮提案に反対したことを指摘していることからもわかる（ES: 144–145）。また一九一七年の論文で「党派などもはや存在せず、ただ人類のみ（Ich kenne keine Parteien mehr, ich kenne nur Menschen.）」（ES: 116）と、ヴィルヘルム二世の一次大戦開戦演説を平和主義的文言に言い換えていることからも読み取ることができるといえよう。ヴィルヘルム二世の演説は「人類」の部分が「ドイツ人」であり、ナショナリズムと戦意をあおる国粋主義的なものだった。

だがラマシュの反ドイツ＝プロイセン感情は彼のテキストからよりも、周囲の証言から鮮明に知ることができる。例えば一次大戦中ザルツブルクのラマシュ宅を訪れたことがあるシュテファン・ツヴァイクは、自伝『昨日の世界（*Die Welt von Gestern*）』の中で、ラマシュにドイツとの同盟破棄の可能性を示唆されたことを記している[29]。また一九一八年にラマシュと会談を行ったアメリカの特使ジョージ・ヘロンは、ラマシュがつねにドイツのことをプロイセンと呼び、プロイセンの勝利とは世界の精神的敗北であり、ヨーロッパの物質主義化に帰結すると、ヘロンに語ったと伝えている[30]。またヨゼフ・シュンペーターは、大戦中かつての師ラマシュに何度か書簡を送ってオーストリアの征服こそドイツの戦争目的ではないかという危惧を示し、一九一六年二月には次のように書き送っている。

プロイセン的で、ルター的で、軍国主義的な中欧が、歯をむき出しにした野獣のような態度で世界中と対立しています。私たちが知り、愛しているオーストリアはもはや存在しないかのようです。私はオーストリアには文化的価値などなく、無抵抗に屈服すべきだなどという考えに転向することなどできません。[31]

後の書簡でシュンペーターがラマシュとの考え方の一致を喜ばしく思うと記していることから、シュンペーターがいわば同じ問題を共有する人物としてラマシュに書簡を送っていたことがわかる。

特にシュンペーターの書簡はフリードリヒ・ナウマンの『中欧論（*Mitteleuropa*）』（一九一五年十一月）が発表され、独墺間の関係強化が叫ばれる時期に送られたものであったことからも重要である。この時代「中欧」というスローガンは何よりもナウマン的な中欧、ドイツ帝国をその盟主とする中欧を意味していた。それに対しラマシュら保守反戦派は、この「ドイツ＝プロイセン的中欧」に「オーストリア的中欧」が脅かされているという危機感を共有していた。[32] ラマシュが直接ナウマンの『中欧論』を論じた数少ない箇所で、彼はナウマン的中欧とはヨーロッパを二つの敵対陣営に分離し、将来の戦争を不可避のものにし、恒久平和を不可能にするものであると批判している（ES: 174）。またナウマンの著書にこそ言及しないものの、一九一七年一月のオーストリア政治協会での講演「われわれの講和目的」[33]においても「中欧というスローガン」を批判している。その中でラマシュは、「中欧」が協商国側にとって大きな脅威である「プロイセン主導下での政治的・軍事的に緊密に統一された国家同盟」とみなされていることに憂慮を示し、即時講和を欲するのであれば、そうした「中欧」を放棄した西と東の媒介者たる「独立した強力なオーストリア」こそ協商国側に歓迎されるであろうと主張する。このようにラマシュやシュンペーターはオーストリアにおける反ドイツ＝プロイセン知識人に分類できる。彼らのドイツ帝国批判、ドイツ＝ナショナル派批判というのは、「オーストリア＝パトリオティズム」派のアイデンティティ・ポリティックスという側面が強く見られるのである。

カール・クラウスは、こうした「オーストリア＝パトリオティズム」が前面に出てくるわけではないものの、非常に辛らつなヴィルヘルム二世の批判者であった。[34] つねに言葉を基準に、語られる「言葉」と実態の乖離を批判し続けたクラウスにとって、ヴィルヘルム二世は侵略戦争に過ぎない一次大戦を、あたかも聖戦であるかのように装飾する最悪の批判対象であった。例を挙げれば、カント哲学とドイツ軍の勝利を結びつけたヴィルヘルム二世の好戦的演説と、戦後に懺悔の日の必要を説くカントの『永遠平和のために』の一節を対比して、ドイツ帝国主義とカント思想の乖離を浮き彫りにした寸評「カント主義者とカント」（F474–483: 155–156）がある。クラウスは一九一八年五月にベルリンで開催した自作朗読会でも挑発的に同作を朗読している。またこの寸評は『人類最後の日々』にもパラフレーズされた（四幕三七場）。他にも「講和の日に」（F474–483: 141–142）という寸評においては、ウクライナとの講和締結後に人類全体の講和の必要を説くオーストリア皇帝カール一世の演説と、なお勝利の講和を望むヴィルヘルム二世の演説を併記し、ドイツ＝プロイセンの好戦性を強調している。ここではヴィルヘルム二世に比したオーストリア皇帝カール一世の平和志向が肯定的に評価されているともいえる。クラウスにとってドイツの勝利とは精神の貧困化による物質的勝利を意味し、彼の眼前にあるドイツとはもはや詩人と思想家（Dichter und Denker）の国ではなく、裁判官と死刑執行人（Richter und Henker）の国にすぎなかった（一幕二九場）。もちろん『人類最後の日々』にはハプスブルク帝国やフランツ・ヨーゼフへの批判も見られるが、全体的にドイツ帝国とヴィルヘルム二世への批判のほうが辛らつであるといえるのである。

またクラウスは独墺関係の拡大にも強く反対した。一九一八年五月の独墺両帝会談を、独墺関係の「拡大深化」であると喧伝するマスコミに対して、クラウスはそれが従属の強化に過ぎないと批判を行っている。その名の通り「拡大深化」（F484–498: 1–12）（五幕八場・九場にパラフレーズ）と題された寸評では、同月の新聞から様々な「拡大深化」という語の用例のモンタージュを行い、最後には一次大戦中の日本による中国への侵略的要求に関する報道を引用し

て、まさに日中関係が「拡大深化」されている、と諷刺的コメントを書き加えている。クラウスからすれば独墺関係とは日中関係に比すべき従属関係にすぎなかった。ましてや、そもそもこの会談は、オーストリア皇帝カール一世の対仏単独和平工作が露見したことによりドイツ参謀本部への弁明を強いられた、「皇帝のカノッサ行き」だったのである。[35]

(二) ラマシュの理念

次にラマシュの理念について論じたい。まず外交面においてラマシュが一義的に求めたものは早期の栄誉ある講和であった。ラマシュにとっての栄誉ある講和とは、領土併合や賠償を伴わない講和であり、なによりもハプスブルク帝国の領土が保全される講和を意味していた。ラマシュの反戦思想とは、ハプスブルク帝国の枠組みの維持を目指すという「オーストリア的中欧」への深い愛着から発していたものなのである。またそれと同時に求めたのが戦後の国際的仲裁機関の設置であった。[36] ラマシュはハーグ仲裁裁判所を発展させたような国際的組織の必要性を論じ、アメリカ大統領ウッドロウ・ウィルソンに対しても戦時中から好意的な評価を行っている（ラマシュは戦後ウィルソンの演説集の独訳を刊行している）。[37] そのようなラマシュにとって講和並びに国際的仲裁機関両方の阻害要因と考えられたのが、ドイツ＝プロイセンの権力政治とナウマン的な「中欧」であった。

> 「中欧」理念に対し、私は争いの平和的調停のための組織と平和に対するあらゆる国々からなる共同保障を伴った、平和維持のための国家連盟を対置した。ウィルソンの念頭にあるようなそうした普遍的な国家連盟は、敵味方ともにあらゆる特殊な同盟関係を不要なものにするし、ヨーロッパに平静をもたらすという目的を、一九一四年に完全に自らの無力さをさらけ出した勢力均衡の政治よりも確実に達成する（ES: 174-175）。

ここで批判を加えるドイツ＝ナショナルな「中欧」に対し、ラマシュは国家連盟を置くわけであるが、この国家連盟構想にはラマシュの国際法志向に加え、「オーストリア的中欧」理念への自負も見られる。相互に敵対するネーション＝ステートからなる世界がこうした国際的な上位機関を作るに際して、多民族国家として「ヨーロッパのミニチュア」であったオーストリアから学ぶところは大きいとラマシュは考えている（ES: 121）。ハプスブルク帝国という多民族国家において、個々のネーションのナショナリズムを超えた統合原理を生み出そうとすれば、それは一定程度「普遍性」に開かれた原理にならざるを得ない。ラマシュはこの観点から、「オーストリア的中欧」の統合理念とヨーロッパさらには国際社会における国家間組織の問題を並行的に論じうると考えていたのである。クラウスとの対応を言えば、彼がこうした講和や国際組織の設立という理念に賛意を示していたことは、先に論じた「第二部」という論文から明らかであるといえよう。

次に内政問題である。国内改革問題はラマシュの反戦思想において、講和や国際的仲裁機関といった外交と不可分の関係にあると考えられていた。戦時下での中央集権化とドイツ中心主義の強化を改め、オーストリアを多民族連邦国家に改組する必要があることをラマシュは強く主張する。上述のように栄誉ある講和をハプスブルク帝国の枠組みの維持と捉えるラマシュにとって、国内改革はこの枠組みの維持にとって不可欠であった。

> われわれは次のことを考慮に入れねばなりません。オーストリアは多民族国家（Nationalitätenstaat）であり、多民族国家にふさわしいのは、何よりも、運動・自治・自決の自由であると。諸民族の自決権。非常に誤解の多い言葉です。諸民族の自決権とは、数百年かけて慣れ親しんだあらゆる関係、経済的にも深く根付いたあらゆる関係を引き裂き、言葉の呪物（Fetisch）の犠牲にすることでなければ、諸国家が言語的要素によりばらばらに引き裂かれ、言語的に単一の共同体からなる小さな単位へと砕けることを意味するのでもありません。諸民族の自決権とは、一つの同じ大きな国家に同居している諸民族が――少なくともあ

る観点からして――自らの事柄を自分で処理するということを意味しているのです（ES: 140）。

ラマシュは一九一七年六月の「第一演説」でこのように主張すると共に、こうした自治の実現を「オーストリア理念」と呼んでいる。具体的な文脈で言えば、チェコ人を代表とするスラブ民族に自治権を与え、ドイツ人、マジャール人と平等の立場に引き上げることをラマシュは必要と考えていたのである。ラマシュは同じ反戦グループに属するユリウス・マインルに宛てた書簡の中でも、一八四八年革命に際しハプスブルク帝国の枠内での自民族の同権を求めたチェコ人政治家フランティシェク・パラツキーを引き合いに出し、「もし七〇年前にパラツキーのプランを実行していれば、オーストリアは力強い文化国家であっただろう」と連邦化の必要を主張している[38]。

従来ハプスブルク帝国における民族問題の解決案については、カール・レンナーやオットー・バウアーらの大著の存在もあって、もっぱらオーストロ・マルクス主義の理論が注目されてきた[39]。しかし保守層内部でドイツ＝ナショナル派を批判する「オーストリア＝パトリオティズム」派から、ラマシュのような改革案が主張されていたことにも注意が払われるべきだろう。これは国内改革をしなければハプスブルク帝国の枠組みの維持が困難であるという現実政治的な必要に迫られたものであったと同時に、諸民族の同権こそネーション＝ステートとは異なる多民族国家としてのハプスブルク帝国にふさわしいという「オーストリア的中欧」理念から生じたものでもあったのである。

ではクラウスはこうした帝国内のナショナリズムについてどう考えていたのだろうか。クラウスはドイツ＝ナショナル派への批判、軍縮、国際的仲裁機関の設置に関し、前章で見たように、ラマシュを肯定的に引用しているが、クラウスのラマシュ論の中ではラマシュの国内改革に関する部分は引用されていないのである。だがそもそもクラウスはナショナリズムという現象それ自体に批判的であった。一次大戦前に発表された、次の皮肉に富んだ二つのアフォリズムはクラウスのナショナリズム観を如実に示すものであるといえよう。

ナショナリズムとは、私を同じ国の愚か者と、私の倫理を侮辱する者と、私の言語を汚す者と結び付ける愛のことである（F264-265: 26）。

ショービニズムや人種差別ほど狭量なものはない。私にとって全ての人間は平等である。いたるところに馬鹿はいるし、全員に対して私は平等に軽蔑の念を抱いている。ちっぽけな先入観などなければいいのに（F264-265: 28）。

同時代に活躍した他の多くの知識人と同様に、ベーメン生まれのウィーン育ちで、同化ユダヤ人の家系であるクラウスは、「オーストリア的中欧」の多民族性を体現する人物であった。このことはメーレン出身の同化ユダヤ人レートリヒやシュンペーターにも当てはまる。それゆえクラウスはこの「オーストリア的中欧」の枠組みそれ自体を破壊しようとするドイツ＝ナショナル派を含めたあらゆるナショナリストに対してきわめて批判的だったのである。

五　まとめ

これまで見てきたようにカール・クラウスが熱心に支持したラマシュの反戦思想というのは、現実政治的側面から見ればオーストリア保守派の反戦思想に位置づけることができる。そしてラマシュを軸にクラウスとシュンペーターのような到底同列に論じられることのない二人のオーストリア人が、一次大戦への反応の形式という点で一致していることが見て取れるのである。ドイツ＝プロイセンとは独立したオーストリアの存在意義を説くラマシュの思想は、ドイツ＝ナショナルなナウマン的中欧とは異なる「オーストリア的中欧」に基づくものだった。

こうしたラマシュに代表されるオーストリア保守派の反戦思想は現代から見ても非常に興味深い。オーストリアにおいては「多民族国家」というハプスブルク帝国の独自性を維持するという「保守」の思想が、逆にドイツ＝プロイ

センの主導する戦争に対する独特の反戦的態度を生んだ。これをバウアーは「まったく独特なオーストリアの平和主義」と評価したのである。ドイツとは異なるオーストリア独自の道を模索するがゆえに彼らは単独講和を求めたし、国際問題の解決のためには仲裁機関が必要であり、「ヨーロッパのミニチュア」、「ミクロコスモス」たるハプスブルク帝国がその範たるべしという自負を持っていた。また多民族帝国の中で諸民族が真の意味で共存するためには、ドイツ中心主義を改め諸民族の平等を実現しなければならないという課題も認識していた。

もちろん現実政治において彼らの思想が実現可能なものであったかどうかといえば、そこに疑問符がつくのは間違いない。外ではドイツ軍に政策の決定権を握られ、内にはスラブ人への権限付与に反対するハンガリーを抱えたハプスブルク帝国にとって、ラマシュらの反戦思想は実現が難しいものであったし、現にカール一世の和平工作と遅きに失した国内改革は失敗に終わったのである。またオーストリア保守思想をそのまま反戦平和主義と等置することはできない。オーストリア保守思想には、ハプスブルク帝国内でのドイツ人の優位を維持するという側面も存在し、ナウマン的中欧を支持するドイツ＝ナショナル派の中には、ナウマンの著書の中に中欧にドイツ文化を広めるという意味でのオーストリアの使命を読み取る者もあった[40]。ラマシュの立場は保守派の中でも少数派だったのであり、「オーストリア的中欧」理念なるものを単純に肯定的に捉えるわけにはいかない。

しかしこうしたハプスブルク帝国内のドイツ人の既得権益を「保守」しようとする勢力と、ラマシュら保守反戦派の違いは、後者が「オーストリア的中欧」理念をもとに早期の無併合・無賠償の講和の必要を説き、ドイツ＝ナショナル派のイデオロギーを暴露し、国際的仲裁機関の設置を求め、国内諸民族の同権を訴えたことにある。彼らにとっての「オーストリア的中欧」理念の意義は、現状を追認するのではなく、その概念の中身を換骨奪胎することでラディカルな現状批判の理念へと変えたことにある。逆説的であるが、彼らの主張は「特殊」オーストリア的な「保守」思想に基づいた、「普遍」的反戦平和主義という「革新」的主張であったといえるのである。

最後に残る問題は果たしてクラウスに積極的な意味での「オーストリア的中欧」の視座があったのかどうかということである。クラウスのラマシュ支持をあくまでラマシュの思想のうちにある早期講和や国際的仲裁機関の設置などの具体的目標への共鳴のうちに読み込み、ラマシュの反戦思想の根底にあった「オーストリア的中欧」理念とは無関係と主張することも可能といえるからである。しかしここで強調しておきたいのは、ドイツ＝プロイセン主導の侵略戦争、ナウマン的中欧論に反対する知識人はルドルフ・ヒルファディング、カール・カウツキーなど社会主義者の間にも数多く存在したにもかかわらず[41]、クラウスが『ファッケル』でもっぱら保守派の政治家ハインリヒ・ラマシュを評価し、さらにはまた痛烈な「ナショナリズム」批判者であったにもかかわらず、ラマシュの「より純粋で深い意味でのパトリオティズム（reinere und im tieferen Sinn patriotische Herzen）」を高く評価していたことである（F474–483: 46）。

一次大戦直前、一九一四年七月の『ファッケル』でオーストリアの「フォーティンブラス」たるべきフランツ・フェルディナントの死を悼んだクラウスは（F400–403: 1–4）、フランツ・フェルディナントのアドバイザーを務めたこともあるハインリヒ・ラマシュの反戦思想に強く共鳴した。一九二〇年代には一時期社会民主党に接近するものの、ナチズムによるアンシュルス（合邦）の脅威の中クラウスが支持したのはエンゲルベルト・ドルフスのオーストロ・ファシズム政権であった。自由主義の腐敗、戦争、ナチズムという時代の危機に対して彼が対抗軸として支持したのは、繰り返しになるが、「オーストリア的中欧」理念を持つ上記の政治家たちだった。革新と保守の同居がつねに問題となるクラウス思想の「保守」性の部分の考察に当たっては、彼の「オーストリア人」としての意識、「オーストリア的中欧」の視座が彼の思想に与えた影響を忘れてはならないのである。

*カール・クラウスとハインリヒ・ラマシュの著作は以下のように略記した。
・『ファッケル』（*Die Fackel*）からの引用はKösel Verlagの復刻版を使用した。引用に際しては本文中にFと略記し、号数、頁数の順番に記載した。
・『人類最後の日々』（*Die letzten Tage der Menschheit*）はWagenknecht版（Karl Kraus, *Schriften*, Band 10, Frankfurt am Main, 1986.）を使用した。邦訳は『カール・クラウス著作集』九巻並びに一〇巻（池内紀訳、法政大学出版、一九七一年）。引用に際しては本文中に幕と場の数を記載した。
・Heinrich Lammaschの反戦論文集*Europas elfte Stunde*（München, 1919.）からの引用に際しては本文中にESと略記し、頁数を記載した。

（1）加藤周一「カルル・クラウス――『人類最後の日々』について」『加藤周一自選集』第三巻、岩波書店、二〇〇九年、二七八頁。
（2）クラウスは一八九九年に創刊した同誌を基盤に、一九三六年に亡くなるまで全九二二号にわたり旺盛な批評活動を行った。
（3）Claudio Magris, *Der habsburgische Mythos in der österreichischen Literatur*, Übersetzung von Madeleine von Pasztory, Salzburg. 1966, S. 236.（『オーストリア文学とハプスブルク神話』鈴木隆雄、藤井忠、村山雅人訳、書肆風の薔薇、一九九〇年、三三四頁）。
（4）Steven Beller, *Vienna and the Jews*, Cambridge University Press, 1989, p. 187.（『世紀末ウィーンのユダヤ人』桑名映子訳、刀水書房、二〇〇七年、二一七頁）。
（5）ナウマンを中心としたドイツ＝ナショナリズムとしての中欧研究としては、板橋拓己『中欧の模索――ドイツナショナリズムの一系譜』（創文社、二〇一〇年）を参照のこと。
（6）Birgit Morgenbrod, *Wiener Grossbürgertum im Ersten Weltkrieg. Die Geschichte der "Österreichischen Politischen Gesellschaft" (1916-1918)*, Wien, 1994, Kap. 1 und Kap. 3. なおこの場合の「オーストリア市民層」とは、ハプスブルク帝国においてドイツ語を母語とする市民層を指す。
（7）Otto Bauer, *Die österreichische Revolution*, Wien, 1923, S. 60.（『オーストリア革命』酒井晨史訳、早稲田大学出版局、

一九八九年、九〇頁）。バウアーは同箇所で「オーストリアの平和主義」を次のように説明している。「この平和主義の中には、戦争に対する人間的嫌悪とウィルソンの講和のメッセージに対する平和主義的信仰が、旧オーストリアのパトリオティズムと旧オーストリアのプロイセンに対する憎悪、さらに君主国滅亡への憂慮と民族革命と社会革命に対する恐怖とが混在していた。ラマシュの人格がこの平和主義的潮流に意義を与えた（傍点引用者）」。

（8）「オーストリア的中欧」に関する邦語先行研究は、村松恵二『カトリック政治思想とファシズム』（創文社、二〇〇六年、特に第四章）を参照のこと。村松の研究は、一九三〇年代にナチズムによるオーストリアのアンシュルス（合邦）の脅威の下で、オーストリアの独立を主張したオーストリア・イデオロギー（本論で言う「オーストリア的中欧」理念）をその対象にしたものである。しかし村松は同時に、ドイツナショナリズムの圧力が高まるときに「〈曲げられた小枝〉の反発」として生じるこうした理念が一九世紀までさかのぼって検討しうることを示唆し、その捉えがたさについても次のように指摘している。「〈オーストリア・イデオロギー〉を一義的に定義するのは必ずしも容易ではない。このイデオロギーを実現するための組織が形成されたわけでもなく、また特定の理論家を中心に形成された理論体系が存在したのでもない。また〈オーストリア・イデオロギー〉は、いわば即興的に形成されたイデオロギーであり、考え抜かれたイデオロギーではない」（同二一六頁）。

（9）フランツ・フェルディナントとの関係については、ラマシュ自身による回想がある。Heinrich Lammasch, Erzherzog Franz Ferdinand, in: Marga Lammasch und Hans Sperl（Hg.）, *Heinrich Lammasch. Seine Aufzeichnungen, sein Wirken und seine Politik*, Wien, 1922, S. 77–95.

（10）ラマシュの経歴に関して主に参考にしたのは、注（9）に挙げたマルガ・ラマシュとハンス・シュペールによる編著に加え、以下の文献である。Albert Fuchs, *Geistige Strömungen in Österreich, 1867 bis 1918*, Wien, 1949, S. 265–271. ; *Österreichisches biographisches Lexikon 1815–1950*, Band IV, Wien, 1950, S. 415–416. ; Stephan Verosta, Der Bund der Neutralen. Heinrich Lammasch zum Gedächtnis, in: *Anzeiger der österreichischen Akademie der Wissenschaften*, philosophisch=historische Klasse, 106. Jahrgang 1969, Nr. 12, S. 175–198. ; Fritz Fellner, Heinrich Lammasch, in: Helmut Donat und Karl Holl（Hg.）, *Die Friedensbewegung. Organisierter Pazifismus in Deutschland, Österreich und in der Schweiz*, Düsserdorf, 1983, S. 243–245. ; Erich Kussbach, Heinrich Lammasch. Scholar of Public International Law and Austrian Statesman, in: *Miskolk Journal of International Law*, Vol. 1. 2004, No. 2, pp. 64–78.

(11) James Brown Scott, Heinrich Lammasch (1853–1920), in: *The American Journal of International Law,* Vol. 14, No. 4, Oct. 1920, p. 609.

(12) W. R. Bisschop, Heinrich Lammasch, in: *British Yearbook of International Law,* 1920–1921, p. 230.

(13) Morgenbrod, *Wiener Grossbürgertum im Ersten Weltkrieg,* S. 50.

(14) Jens Malte Fischer, Das technoromantische Abenteur. Der Erste Weltkrieg im Widerschein der Fackel, in: Klaus Vondung (Hg.), *Kriegserlebnis,* Göttingen, 1980, S. 284.

(15) Alfred Pfabigan, *Karl Kraus und der Sozialismus,* Wien, 1976, S. 186.

(16) Pfabigan, *ibid.*, S. 173–176.

(17) 太田隆士「カール・クラウスの『人類最後の日々』試論――戦争と報道」『駿河台大学論叢』二三号、二〇〇一年、五五頁。Harry Zohn, *Karl Kraus,* Übersetzung von Ilse Goesmann, Frankfurt am Main, 1990, S. 87.

(18) Frank Field, *The Last Days of Mankind, Karl Kraus and his Vienna,* London, 1967, pp. 123–124. ; Edward Timms, *Karl Kraus, Apocalyptic Satirist, Culture and Catastrophe in Habsburg Vienna,* Yale University Press, 1986, p. 356.

(19) Field, *ibid.*, p. 124.

(20) Timms, *Karl Kraus,* 1986, p. 363. ; Edward Timms, *Karl Kraus, Apocalyptic Satirist, The Post-War Crisis and the Rise of the Swastika,* New Heaven, 2005, pp. 486–487.

(21) Paul Schick, *Karl Kraus,* Hamburg, 1965, S. 90.

(22) ラマシュ並びに保守反戦グループに関しては以下の研究がある。Morgenbrod, *Wiener Grossbürgertum im Ersten Weltkrieg.* ; Heinrich Benedikt, *Die Friedensaktion der Meinlgruppe 1917/18,* Graz–Köln, 1962. ; Günther Ramhardter, *Geschichtswissenschaft und Patriotismus. Österreichsche Historiker im Weltkrieg 1914–1918,* Wien, 1973, S. 62–72.

(23) クラウスの「テクノロマン主義」論については、髙橋義彦「カール・クラウスと第一次世界大戦」(『法学政治学論究』八六号、二〇一〇年、一五〇―一五三頁)を参照のこと。

(24) *Neue Freie Presse,* 2. März, 1918, S. 5. ; Bisschop, Heinrich Lammasch, p. 290.

(25) Heinrich Friedjung, Gegner des deutschen Bündnisses in Österreich, in: *Vossische Zeitung,* 8. März, 1918. ; Heinrich Friedjung, Die Gegner des Bündnisses mit Deutschland, in: *Neue Freie Presse,* 17. März, 1918.

(26) Stephan Verosta, Josepf Schumpeter gegen das Zollbündnis der Donaumonarchie mit Deutschland und gegen die Anschlusspolitik Otto Bauers, in: Michael Neider (Hg.), *Festschrift für Christian Broda,* Wien, 1976, S. 393–394.

(27) George Herron, Heinrich Lammasch's suggestion for peace in Bern 1918, in: *Heinrich Lammasch. Seine Aufzeichnungen, sein Wirken und seine Politik,* S. 188.

(28) Morgenbrod, *Wiener Grossbürgertum im Ersten Weltkrieg,* S. 75.

(29) Stefan Zweig, *Gesammelte Werke in Einzelbänden,* Band IV, Frankfurt am Main, 1981, S. 296–300.（『昨日の世界』原田義人訳、みすず書房、一九六一年、三八六―三九〇頁）。ツヴァイクは同箇所でラマシュを次のように評価している。「二人とも（ハインリヒ・ラマシュとイグナツ・ザイペルのこと――引用者注）断固たる平和主義者であり、厳格な信仰を持つカトリック教徒であり、情熱的な旧オーストリア人であった。そしてこのような人物として、ドイツ的＝プロイセン的＝プロテスタント的軍国主義に対してもっとも深い敵対関係にあった。彼らはこのような軍国主義をオーストリアの伝統的理念とそのカトリック的使命とは結合し得ないものと感じていた（傍点引用者）」。

(30) Herron, Heinrich Lammasch's suggestion for peace in Bern 1918, S. 189.

(31) Verosta, Josepf Schumpeter gegen das Zollbündnis der Donaumonarchie mit Deutschland und gegen die Anschlusspolitik Otto Bauers, S. 384–385.

(32) Ramhardter, *Geschichtswissenschaft und Patriotismus,* S. 69.

(33) Heinrich Lammasch, Unsere Friedensziele, in: Benedikt, *Die Friedensaktion der Meingruppe 1917/1918,* S. 65–69.

(34) クラウスのヴィルヘルム二世批判に関しては、Monika Glettler, Karl Kraus zwischen Prussophielie und Prussophobie. Bismarck und Wilhelm II in die Fackel.（*Österreich in Geschichte und Literatur,* XXIII, Nr. 3, 1979, S. 148–166.）を参照のこと。

(35) フリッツ・フィッシャー『世界強国への道――ドイツの挑戦 1914–1918』第二巻、村瀬興雄監訳、岩波書店、一九八三年、三一六頁。

(36) ラマシュのこうした国際的上位機関に関する考えを簡潔にまとめたものとして、Bert Riehle, *Eine neue Ordnung der Welt. Föderative Friedenstheorien im deutschsprachigen Raum zwischen 1892 und 1932.*（Göttingen, 2007, S. 77–80.）を参照のこと。

(37) Heinrich Lammasch, *Woodrow Wilsons Friedensplan,* Leipzig, 1919. レートリヒの回想によれば、ラマシュは学生時代のレートリヒにウィルソンの著作を読むよう勧めていたようであり、ラマシュのウィルソンへの関心が一次大戦をはるかに遡る

ものであることがわかる（James Brown Scott, Heinrich Lammsch, p. 612.）。

（38） Heinrich Lammasch, Brief an Meinl, 25. Februar, 1917, in: Benedikt, *Die Friedensaktion der Meinlgruppe 1917/1918*, S. 69.

（39） 古典的な邦語研究として、矢田俊隆「オーストリア社会民主党と民族問題」（『ハプスブルク帝国史研究――中欧多民族国家の解体過程』岩波書店、一九七七年、二九一―三四七頁）を参照。またレンナー、バウアーの民族問題に関する大著には邦訳がある。カール・レンナー『諸民族の自決権――特にオーストリアへの適用』大田仁樹訳、御茶の水書房、二〇〇七年。オットー・バウアー『民族問題と社会民主主義』丸山敬一、倉田稔、相田慎一、上条勇、大田仁樹訳、御茶の水書房、二〇〇一年。

（40） Henry Cord Meyer, *Mitteleuropa. In German Thought and Action 1815–1945*, Hague, 1955, p. 210.

（41） ヒルファディング、カウツキーら社会主義者による、大ドイツ主義的・ナウマン的中欧論への反論については、河野裕康「ヒルファディングと中欧構想」（『社会思想史研究』、第一一号、一九八七年、一七七―一九三頁）を参照のこと。ただし当然の事ながら社会主義者の反論は、経済的分析や反帝国主義に基づくもので、「オーストリア的中欧」理念に基づくものではない。

＊欧語文献に関して、邦訳のあるものは基本的にそれに依拠し、適宜訳語の変更等を行っている。

＊本研究は「博士課程学生研究支援プログラム」の補助を受けている。

髙橋　義彦（たかはし　よしひこ）
所属・現職　慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程
最終学歴　慶應義塾大学大学院法学研究科前期博士課程
所属学会　社会思想史学会、政治思想学会
専攻領域　政治思想史、オーストリア・ドイツ政治文化史
主要著作　「都市とメトロポリスの間で――ショースキー世紀末ウィーン論の再検討」『法学政治学論究』第八二号（二〇〇九年）
「カール・クラウスと第一次世界大戦」『法学政治学論究』第八六号（二〇一〇年）